02.
AFSUMB

AFSUMBについて

谷口 信行
（President of AFSUMB）

第1回アジア超音波医学学術連合会が，開催されたのは1987年のことで，ちょうど第50回日本超音波医学会研究発表会（竹内久彌会長）と合わせて東京で開催された．初代のAFSUMBのPresident（理事長）は和賀井敏夫先生であった．第2回が，89年にインドネシアのバリで開催，その後は3年おきに92年がソウル，95年が北京，98年が台北，2001年がクアラルンプール，そして2004年が伊東紘一会長のもと宇都宮で開催された．AFSUMB設立の経緯などは，渡邉泱先生が本会の機関誌に詳しく述べられておられるため，ここでは割愛させていただき最近の様子をお話ししたい．なお，渡邉先生の文章から，学会の設立の様子，先生のご苦労がうかがえ（超音波医学28巻7号），ぜひともご一読されることをお勧めしたい．

さて，その後のAFSUMBの活動であるが，2007年（第8回）にKittipong会長のもとバンコクで，2010年（第9回）にVanjani会長のもとでインドで開催されてきた．これまで，原則的に3年ごとに行われていた大会であるが，WFUMBが2年ごとの開催に変更となったため，AFSUMBも2年ごととなり，ちょうどWFUMBとAFSUMBが交互の年に開催されるようになった．今年から2年間隔となった最初の会であるAFSUMB2012がインドネシアのバリ島で開かれる．また，2014年にはマレーシアのクアラルンプールで予定されている．

AFSUMBは，それを構成する各国の超音波関連学会の会員で構成されるが，最も多い会員数を有するのは日本超音波医学会であり，最近では3名の役員を出すことが多い．最近4期の役員は，2001年から2004年が，前理事長が渡邉泱先生，松﨑益徳先生が副理事長，千田彰一先生が庶務であり，工藤正俊先生が理事であった．2004－2007年は，千田先生が副理事長となり，工藤先生が会計，谷口が理事となり，2007-2010年は，工藤先生が次期理事長，副理事長が谷口，増山理先生が理事となった．2010年からは前述のごとく，2年おきの会の開催となったため，役員任期も2012年までの2年間となり，現在の谷口が理事長，工藤先生が会計，秋山いわき先生が理事となっている．本来，前期の役員会で次期理事長に指名されていた工藤先生がAFSUMBの理事長となるはずであった．ところが，この時工藤先生にWFUMBの理事長就任の打診があったが，その時提示されたWFUMBの前理事長からの条件が，WFUMBとAFSUMBの理事長に同時に就任しないことであったため，急遽ピンチヒッターとして，谷口がAFSUMBの理事長に就任することになった．

AFSUMBの活動として最も力を入れているのは，教育である．WFUMBでも教育委員会が行われているが，AFSUMBでは，バンクラデシュのBala先生が委員長として積極的に活動され，年1回程度のワークショップを企画している．また，最近の活動として，これまでAFSUMBではあまり問題にされてこなかった安全委員会を立ち上げWFUMBとの整合性を測るだけでなく，最近進歩の著しい造影剤の診断，弾性画像について

AFSUMBとして委員会レベルでも活動を行っている．

本会としていつも問題となるのは，AFSUMBの費用負担であり，現在日本超音波医学会はAFSUMBに正会員一人当たり1.5ドル，WFUMBに同じく1.5ドルの拠出を行っている．WFUMBは雑誌からの収入が大変多く財政的に余裕があるが，AFSUMBの財政基盤は弱く，さらに教育委員会の企画など費用がかさむことが最近の話題となり，今後の活動について議論中である．

AFSUMBの機関誌はJournal of Medical Ultrasoundで台湾の超音波医学会の機関誌と相乗りして発行されている．本会のJournal of Medical Ultrasonicsとしばしば間違えやすいので，ご留意いただきたい．

今後の課題としてあげられるのは，日本超音波医学会として，WFUMBだけでなくAFSUMBのメンバーとしてどのように活動するかのスタンスが不明確な点である．今後のアジアの中で超音波医学をリードするためには，AFSUMBの活動に重心を置く必要があるが，現時点での会員自身へのフィードバックが少なく，躊躇される点である．もう一つは，中国とAFSUMBの関係である．現在台湾からは，複数名の役員が参加しているが，中国は対外的な学会活動が国の方針で自由にならないため，多くの超音波に関する研究活動が行われているにも関わらず，AFSUMB内での活動がほとんど見られていない．今後の方向は明確ではないが，展開が期待される．